シリーズ　気になる「癌と検査」のこと　専門医が教えます ⑤

大腸癌と便の検査について

日本臨床検査専門医会
日野田 裕治

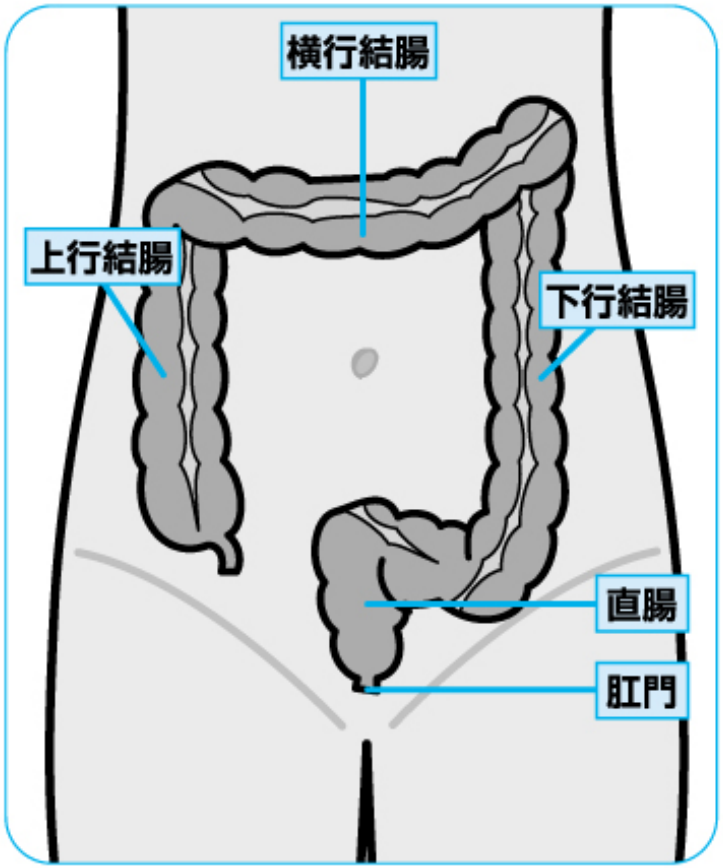
■ 大腸癌は治療法が進んでいると聞きますが、ほとんど治るのでしょうか？

癌が小さい(早期)うちはほぼ100％治ります。大腸内視鏡治療や腹腔鏡手術が普及しており、お腹を大きく切らなくても治療することができ、入院期間も大変短くてすみます。しかし、現在でも病院で大腸癌と診断される人の約４割は進行した癌で、大きな手術や抗癌剤による治療を必要としています。進行するほど死亡率も高くなります。とくに転移(てんい)(癌が大腸から離れた場所－腹膜、肝臓、肺などーに拡がること)があると５年生存率(５年後に生きている確率)は10％程度しかありません。早く見つけるのが肝心ということです。

■ 早く見つけるにはどうすればよいのですか？

大腸癌の症状には、便に血が混じる、便の出が悪くなるなどがあります。これは大腸の出口(肛門)に近いところ(直腸など)に癌ができたときに現れやすいのですが、奥に行くほど、癌が大きくならないと症状は出ません(図をご覧下さい)。このため、症状が現れるのを待っていたのでは遅いのです。40歳を過ぎたら、健康診断で便鮮血反応(べんせんけつはんのう)という検査を受けましょう。食事に関係なく、少量の便を２回(日を変えて)採るだけです。便鮮血反応は便の中に含まれるヘモグロビン(赤血球の成分)を測定します。癌は正常の組織よりも出血しやすいので、このような検査法ができました。

図：大腸の構造



■ 便鮮血反応を受けると100％大腸癌が見つかるのですか？

残念ながら100％ではありません。早期癌で3割、進行癌では５～8割くらい(進行するほど上がります)の確率で見つかります。大したことないなあ、と思われるかもしれませんが、この検査を受けないと、癌が進行して何らかの症状が出るまで全くわからないのですから、大きな違いがあります。便鮮血反応で測定しているヘモグロビンは蛋白質なので、時間とともに大腸の中で壊れていきます。そのため、肛門に近い部位の癌ほど見つかりやすいのですが、都合の良いことに、大腸癌の70～80％は、図の下行結腸から直腸まで（左側結腸と呼びます）の間にできるのです。国内での大規模な研究の結果によると、便潜血反応を受けた人は、受けていない人に比べて、大腸癌で亡くなる確率が70％も減少しました。10割の確率が3割に減るのですから、受けない手はありません。